

<物語の文章>

作品名：白雪姫

著者名：グリム ヤーコプ・ルートヴィッヒ・カール
グリム ヴィルヘルム・カール

(略)

「鏡^{かがみ}や、鏡、壁^{かべ}にかかっている鏡よ。

国じゅうで、だれがいちばんうつくしいか、いっておくれ。」

すると、鏡はいつもこう答えていました。

「女王さま、あなたこそ、お国でいちばんうつくしい。」

それをきいて、女王さまはご安心なさるのでした。というのは、この鏡は、うそをいわないということ、女王さまは、よく知っていたからです。

そのうちに、白雪姫^{しらゆきひめ}は、大きくなるにつれて、だんだんうつくしくなってきました。お姫さまが、ちょうど七つになられたときには、青々と晴れた日のように、うつくしくなって、女王さまよりも、ずっとうつくしくなりました。ある日、女王さまは、鏡の前にいって、おたずねになりました。

「鏡や、鏡、壁にかかっている鏡よ。

国じゅうで、だれがいちばんうつくしいか、いっておくれ。」

すると、鏡は答えていました。

「女王^{じょおう}さま、ここでは、あなたがいちばんうつくしい。

けれども、白雪姫^{しらゆきひめ}は、千ばいもうつくしい。」

女王さまは、このことをおききになると、びっくりして、ねたましくなって、顔を黄いろくしたり、青くしたりなさいました。

さて、それからというものは、女王さまは、白雪姫をごらんになるたびごとに、ひどくいじめるようになりました。そして、ねたみと、こうまんとが、野原の草がっぱいはびこるように、女王さまの、心の中にだんだんとはびこってききましたので、いまでは夜もひるも、もうじっとしてはいられなくなりました。

そこで、女王さまは、ひとりのかりうどをじぶんのところにおよびになって、こういいつけられました。

「あの子を、森の中につれていっておくれ。わたしは、もうあの子を、二どと見たくないんだから。だが、おまえはあの子をころして、そのしょうこに、あの子の血^ちを、このハンケチにつけてこなければなりません。」

かりうどは、そのおおせにしたがって、白雪姫^{しらゆきひめ}を森の中へつれていきました。かりうどが、狩^かりにつかう刀^{かたな}をぬいて、なにも知らない白雪姫の胸^{むね}をつきさそうとしますと、お姫さまは泣いて、おっしゃいました。

「ああ、かりうどさん、わたしを助けてちょうだい。そのかわり、わたしは森のおくの方にはいって行って、もう家にはけっしてかえらないから。」

これをきくと、かりうども、お姫さまがあまりにうつくしかったので、かわいそうになってしまって、

「じゃあ、はやくおにげなさい。かわいそうなお子さまだ。」といいました。

「きっと、けものが、すぐでてきて、くいころしてしまうだろう。」と、心のうちで思いましたが、お姫さまをころさないですんだので、胸の上からおもい石でもとれたように、らかな気もちになりました。ちょうどそのとき、イノシシの子

が、むこうからとびだしてきましたので、かりうどはそれをころして、その血をハンケチにつけて、お姫さまをころしたしょうこに、女王さまのところに持っていきました。女王さまは、それをごらんになって、すっかり安心して、白雪姫は死んだものと思っていました。

さて、かわいそうなお姫さまは、大きな森の中で、たったひとりぼっちになってしまって、こわくってたまらず、いろいろな木の葉っぱを見ても、どうしてよいのか、わからないくらいでした。お姫さまは、とにかくかけだして、とがった石の上をとびこえたり、イバラの中をつきぬけたりして、森のおくの方へとすすんでいきました。ところが、けだものはそばをかけすぎますけれども、すこしもお姫さまをきずつけようとはしませんでした。白雪姫は、足のつづくかぎり走りつづけて、とうとうゆうがたになるころに、一軒の小さな家を見つけましたので、つかれを休めようと思って、その中にはいりました。その家の中にあるものは、なんでもみんな小さいものばかりでしたが、なんともいいようがないくらいりっぱで、きよらかでした。

そのへやのまん中には、ひとつの白い布をかけたテーブルがあって、その上には、七つの小さな皿があって、またその一つ一つには、さじに、ナイフに、フォークがつけてあって、なおそのほかに、七つの小さなおさかずきがおいてありました。そして、また壁ぎわのところには、七つの小さな寝どころが、すこしあいだをおいて、じゅんじゅんにならんで、その上には、みんな雪のように白い麻の敷布がしいてありました。

白雪姫は、たいへんおなかがすいて、おまけにのどもかわいていましたから、一つ一つのお皿から、すこしずつやさいのスープとパンをたべ、それから、一

一つ一つのおさかずきから、一^{てき}滴^{しゆ}ずつブドウ酒をのみました。それは、一つところのを、みんなたべてしまうのは、わるいと思ったからでした。それが、すんでしまうと、こんどは、たいへんつかれていましたから、ねようと思って、一つの寝どこにはいってみました。けれども、どれもこれもちようどうまくからだにあいせんでした。長すぎたり、短すぎたりしましたが、いちばんおしまいに、七ばんめの寝どころが、やっとからだにあいました。それで、その寝どこにはいって、神さまにおいのりをして、そのままグッスリねむってしまいました。

日がくれて、あたりがまっくらになったときに、この小さな家の主人たちがかえってきました。その主人たちというのは、七人の^{こびと}小人でありました。この小人たちは、毎日、山の中にはいりこんで、金や^{ぎん}銀のはいった石をさがして、よりわけたり、ほりだしたりするのが、しごとでありました。^{こびと}小人はじぶんたちの七つのランプに火をつけました。すると、家の中がパッとあかるくなりますと、だれかが、その中にいるということがわかりました。それは、小人たちが家をでかけたときのように、いろいろのものが、ちゃんとおいてなかったからでした。第一の小人が、まず口をひらいて、いいました。

「だれか、わしのいすに^{こし}腰をかけた者があるぞ。」

すると、第二の小人がいいました。

「だれか、わしのお^{さら}皿のものをすこしたべた者があるぞ。」

第三の小人がいいました。

「だれか、わしのパンをちぎった者があるぞ。」

第四の小人がいいました。

「だれか、わしのやさいをたべた者があるぞ。」

第五の小人がいました。

「だれかわしのフォークを使った者があるぞ。」

第六の^{こびと}小人がいました。

「だれか、わしのナイフで切った者があるぞ。」

第七の小人がいました。

「だれか、わしのさかずきでのんだ者があるぞ。」

それから、第一の小人が、ほうぼうを見まわしますと、じぶんの^ね寝どころが、くぼんでいるのを見つけて、声をたてました。

「だれが、わしの寝どころにはいりこんだのだ。」

すると、ほかの^{こびと}小人たちが^ね寝どころへかけつけてきて、さわぎだしました。

「わしの寝どころにも、だれかがねたぞ。」

けれども、第七ばんめの小人は、じぶんの寝どころへいってみると、その中に、はいてねむっている白雪姫を見つけました。こんどは、第七ばんめの小人が、みんなをよびますと、みんなは、なにがおこったのかと思ってかけよってきて、びっくりして声をたてながら七つのランプを持ってきて白雪姫をてらしました。

「おやおやおやおや、なんて、この子は、きれいなんだろう。」と、^{こびと}小人はさけびました。それから小人たちは、大よろこびで、白雪姫^{しらゆきひめ}をおこさないで、^ね寝どころの中に、そのままソツとねさせておきました。そして、七ばんめの小人は、一時間ずつほかの小人の寝どころにねるようにして、その夜をあかしました。

朝になって、白雪姫は目をさまして、七人の小人を見て、おどろきました。けれども、小人たちは、たいへんしんせつにしてくれて、「おまえさんの名まえはなんというのかな。」とたずねました。すると、

「わたしの名まえは、白雪姫というのです。」と、お姫さまは答えました。

「おまえさんは、どうして、わたしたちの^{うち}家にはいつてきたのかね。」と、小人たちはききました。そこで、お姫さまは、ママ母が、じぶんをころそうとしたのを、かりうどが、そっと助けてくれたので、一日じゅう、かけずりまわって、やっと、この家を見つけたことを、小人たちに話しました。その話をきいて、小人たちは、

「もしも、おまえさんが、わたしたちの家の中のしごとをちゃんと引きうけて、にたきもすれば、おとこものべるし、せんたくも、ぬいものも、あみものも、きちんときれいにする気があれば、わたしたちは、おまえさんを^{うち}家においてあげて、なんにもふそくのないようにしてあげるんだが。」といいました。

「どうぞ、おねがいします。」と、お姫さまはたのみました。それからは、白雪姫^{しらゆきひめ}は、小人^{こびと}の家にいることになりました。

白雪姫は、小人の家のしごとを、きちんとやります。小人の方では毎朝、山にはいりこんで、金や^{ぎん}銀のはいった石をさがし、夜になると、家にかえってくるのでした。そのときまでに、ごはんのしたくをしておかねばなりませんでした。ですから、ひるまは白雪姫は、たったひとりですすをしなければなりませんので、しんせつな小人たちは、こんなことをいいました。

「おまえさんのママ母さんに用心なさいよ。おまえさんが、ここにいることを、すぐ知るにちがいない。だから、だれも、この家の中にいれてはいけないよ。」

こんなことはすこしも知らない女王さまは、かりうどが白雪姫をころしてしまつたものだと思って、じぶんが、また第一のうつくしい女になったと安心していましたので、あるとき^{かがみ}鏡の前にいって、いいました。

「鏡や、鏡、^{かべ}壁にかかっている鏡よ。

国じゅうで、だれがいちばんうつくしいか、いっておくれ。」

すると、鏡が答えました。

「^{じょおう}女王さま、ここでは、あなたがいちばんうつくしい。

けれども、いくつも山こした、

七人の小人の家にいる^{しらゆきひめ}白雪姫は、

まだ千ばいもうつくしい。」

これをきいたときの、女王さまのおどろきようといったらありませんでした。

この鏡は、けっしてまちがったことをいわない、ということを知っていたので、かりうどが、じぶんをだましたということも、白雪姫が、まだ生きているということも、みんなわかってしまいました。そこで、どうにかして、白雪姫をころしてしまいたいものだと思ひまして、またあたらしく、いろいろと考えはじめました。女王さまは、国じゅうでじぶんがいちばんうつくしい女にならないうちは、ねたましくて、どうしても、安心していられないからでありました。

そこで、女王さまは、おしまいになにか一つの^{けいりやく}計略を考えだしました。そしてじぶんの顔を黒くぬって、年よりの^{こまものや}小間物屋のような^{きもの}着物をきて、だれにも女王さまとは思えないようになってしまいました。こんなふうをして、七つの山をこえて、七人の^{こびと}小人の家について、戸をトントンとたたいて、いいました。

「よい^{しなもの}品物がありますが、お買いになりませんか。」

白雪姫はなにかと思つて、^{まど}窓から首をだしてよびました。

「こんにちは、おかみさん、なにがあるの。」

「^{じょうとう}上等な品で、きれいな品を持ってきました。いろいろかわったしめひもがあ

ります。」と、いろいろな色の絹糸きぬいとであんだひもを、一つ取りだしました。白雪姫は、

「この正直しょうじき そうなおかみさんなら、家の中にいれてもかまわないだろう。」と思ひまして、戸をあけて、きれいなしめひもを買いとりました。

「おじょうさんには、よくにあうことでしょう。さあ、わたしがひとつよくむすんであげましょう。」と、年よりの小間物屋こまものや はいいました。

白雪姫は、すこしもうたがう気がありませんから、そのおかみさんの前に立って、あたらしい買ったてのひもでむすばせました。すると、そのばあさんは、すばやく、そのしめひもを白雪姫の首をまきつけて、強くしめましたので、息ができなくなって、死んだようにたおれてしまいました。

「さあ、これで、わたしが、いちばんうつくしい女になったのだ。」と、ママ母はいそいで、でて行ってしまいました。

それからまもなく、日がくれて、七人の小人こびとたちが、家にかえってきましたが、かわいがっていた白雪姫が、地べたの上にたおれているのを見たときには、小人たちのおどろきようといったらありませんでした。白雪姫は、まるで死人のように、息もしなければ、動きもしませんでした。みんなで白雪姫を地べたから高いところにつれていきました。そして、のどのところが、かたくしめつけられているのを見て、小人たちは、しめひもを二つに切ってしまいました。すると、すこし息をしはじめて、だんだん元気づいてきました。小人たちは、どんなことがあったのかをききますと、姫はきょうあった、いっさいのことを話しました。

「その小間物売こまものうりの女こそ、鬼おにのような女王にちがいない。よく気をつけなさいよ。わたしたちがそばにいないときには、どんな人だって、家にいれないよう

にするんですよ。」と。

わるい女王の方では、家にかえってくると、すぐ鏡かがみの前にいて、たずねました。

「鏡や、鏡、壁かべにかかっている鏡よ。

国じゅうで、だれがいちばんうつくしいか、いっておくれ。」

すると、鏡は、正直しょうじきにまえとおなじに答えました。

「女王さま、ここでは、あなたがいちばんうつくしい。

けれども、いくつも山こした、

七人の小人こびとの家にいる白雪姫は、

まだ千ばいもうつくしい。」

と、このことを女王さまがきいたときには、からだじゅうの血ちがいつぺんに、胸むねによってきたかと思うくらいおどろいてしまいました。白雪姫が、また生きかえったということを知ったからです。

「だが、こんどこそは、おまえを、ほんとうにころしてしまうようなことをくふうしてやるぞ。」そういって、じぶんの知っている魔法まほうをつかって、一つの毒どくをぬった櫛くしをこしらえました。それから、女王さまは、みなりをかえ、まえとはべつなおばあさんのすがたになって、七つの山をこえ、七人の小人のところにいて、トントンと戸をたたいて、いいました。

「よい品物しなものがありますが、お買いになりませんか。」

白雪姫は、中からちょっと顔をだして、

「さあ、あっちにいてちょうだい。だれも、ここにいけないことになっているんですから。」

「でも、見るだけなら、かまわないでしょう。」

おばあさんはそう言って、^{どく}毒のついている^{くし}櫛を、^{はこ}箱から取りだし、手のひらにのせて高くさしあげてみせました。ところが、その櫛がばかに、白雪姫のお気にいりましたので、その方に気をとられて、思わず戸をあけてしまいました。そして、櫛を買うことがきまったときに、おばあさんは、

「では、わたしが、ひとつ、いいぐあいに^{かみ}髪をといてあげましょう。」といいました。

かわいそうな白雪姫は、なんの気なしに、おばあさんのいうとおりにさせました。ところが、^{くし}櫛の^は歯が髪^{の毛}のあいだにはいるかはいらないうちに、おそろしい毒が、姫の^{あたま}頭にしみこんだものですから、姫はそのばで気をうしなっておれてしまいました。

「いくら、おまえがきれいでも、こんどこそおしまいだらう。」と、心のまがった女は、きみのわるい笑いを浮かべながら、そこをでて行ってしまいました。

けれども、ちょうどいいぐあいに、すぐゆうがたになって、七人の^{こびと}小人がかえってきました。そして、白雪姫が、また死んだようになって、地べたにたおれているのを見て、すぐママ母のしわざと気づきました。それで、ほうぼう姫のからだをしらべてみますと、^{どく}毒の^{くし}櫛が見つかりましたので、それをひきぬきますと、すぐに姫は息をふきかえました。そして、きょうのことを、すっかり小人たちに話しました。小人たちは、白雪姫にむかってもういちど、よく用心して、けっしてだれがきても、戸をあけてはいけないと、ちゅういしました。

心のねじけた女王さまは、家にかえって、^{かがみ}鏡の前に立っていいました。

「鏡や、鏡、^{かべ}壁にかかっている鏡よ。

国じゅうで、だれがいちばんうつくしいか、いっておくれ。」

すると、鏡は、まえとおなじようにに答えました。

「女王さま、ここでは、あなたがいちばんうつくしい。

けれども、いくつも山こした、

七人の小人の家にいる白雪姫は、

まだ千ばいもうつくしい。」

女王さまは、^{かがみ}鏡が、こういったのをきいたとき、あまりの^{はら}腹だちに、からだじゅうをブルブルとふるわしてくやしがりました。

「白雪姫のやつ、どうしたって、ころさないではおくものか。たとえ、わたしの命がなくなっても、そうしてやるのだ。」と、大きな声でいいました。それからすぐ、女王さまは、まだだれもはいったことのない、はなれたひみつのへやにいて、そこで、^{どく}毒の上に毒をぬった一つのリンゴをこさえました。そのリンゴは、見かけはいかにもうつくしくて、白いところに赤みをもっていて、一目見ると、だれでもかじりつきたくなるようにしてありました。けれども、その一きれでもたべようものなら、それこそ、たちどころに死んでしまうという、おそろしいリンゴでした。

さて、リンゴが、すっかりできあがりますと、顔を黒くぬって、百^{しやう}姓のおかみさんのふうをして、七つの山をこして、七人の^{こびと}小人の家へいきました。そして、戸をトントンとたたきますと、白雪姫が、^{まど}窓から^{あたま}頭をだして、

「七人の小人が、いけないといいましたから、わたしは、だれも中にいれるわけにはいきません。」といいました。

「いいえ、はいらなくてもいいですよ。わたしはね、いまリンゴをすててしまおうかと思っているところなので、おまえさんにも、ひとつあげようかと思ってね。」と、百姓しやうの女はいいました。

「いいえ、わたしはどんなものでも、人からもらってはいけないのよ。」と、白雪姫はことわりました。

「おまえさんは、毒どくでもはいつていると思いなさるのかね。まあ、ごらんなさい。このとおり、二つに切って、半分はわたしがたべましょう。よくうれた赤い方を、おまえさんおあがりなさい。」といいました。

そのリンゴは、たいへんじょうずに、こしらえてありまして、赤い方がわだけに、毒どくがはいつていました。白雪姫は、百姓のおかみさんが、さもうまそうにたべているのを見ますと、そのきれいなリンゴがほしくてたまらなくなりました。それで、ついなんの気なしに手をだして、毒どくのはいつている方の半分を受けとってしまいました。けれども、一かじり口にいれるかきれないうちに、バツタリとたおれ、そのまま息がたえてしまいました。すると、女王さまは、そのようすをおそろしい目つきでながめて、さもうれしそうに、大きな声で笑いながら、

「雪のように白く、血ちのように赤く、こくたんのように黒いやつ、こんどこそは、小人こびとたちだって、助けることはできまい。」といいました。そして、大いそぎで家にかえりますと、まず鏡かがみのところにかけつけてたずねました。

「鏡や、鏡、壁かべにかかっている鏡よ。

国じゅうで、だれがいちばんうつくしいか、いっておくれ。」

すると、とうとう鏡が答えました。

「女王さま、お国でいちばん、あなたがうつくしい。」

これで、女王さまの、ねたみぶかい心も、やっとしずめることができ、ほんとうにおちついた気もちになりました。

ゆうがたになって、小人たちは、家にかえってきましたが、さあたいへん、こんども、また白雪姫が、地べたにころがって、たおれているではありませんか。びっくりして、かけよってみれば、もう姫の口からは息一つすらしていません。かわいそうに死んで、もうひえきってしまったのでした。小人たちは、お姫さまを、高いところにはこんでいって、なにか毒^{どく}になるものはありませんかと、さがしてみたり、ひもといたり、髪^{かみ}の毛をすいたり、水や、お酒で、よくあらってみたりしましたが、なんの役にもたちませんでした。みんなでかわいがっていたこどもは、こうしてほんとうに死んでしまって、ふたたび生きかえりませんでした。

小人たちは、白雪姫のからだを、一つの棺^{かん}の上にのせました。そして、七人の者が、のこらずそのまわりにすわって、三日三晩泣きくらしました。それから、姫をうずめようと思いましたが、なにしろ姫はまだ生きていたそのままで、いきいきと顔色も赤く、かわいらしく、きれいなものですから、小人たちは、

「まあ見ろよ。これを、あのまっ黒い土の中に、うめることなんかできるものか。」
そういって、外から中が見られるガラスの棺^{かん}をつくり、その中に姫のからだをねかせ、その上に金^{きん}文字^{もじ}で白雪姫という名を書き、王さまのお姫さまであるということも、書きそえておきました。それから、みんなで、棺を山の上にはこびあげ、七人のうちのひとりが、いつでも、そのそばにいて番をすることになりました。すると、鳥や、けだものまでが、そこにやってきて、白雪姫のことを泣きかなしむのでした。いちばんはじめにきたのは、フクロウで、そのつぎがカラス、いち

ばんおしまいにはトがきました。

さて、白雪姫は、ながいながいあいだ^{かん}棺の中によこになっていましたが、そのからだは、すこしもかわらず、まるで眠っているようにしか見えませんでした。お姫さまは、まだ雪のように白く、^ち血のように赤く、**こくたん**のように黒い^{かみ}髪の毛をしていました。

すると、そのうち、ある日のこと、ひとりの^{おうじ}王子が、森の中にまよいこんで、七人の小人の家に来て、一晩とまりました。王子は、ふと山の上に来て、ガラスの棺に目をとめました。近づくとぞきまると、じつにうつくしいうつくしい少女のからだがいっています。しばらくわれをわすれて見とれていました王子は、棺の上に金文字で書いてあることばをよみ、すぐ小人たちに、

「この^{かん}棺を、わたしにゆずってくれませんか。そのかわりわたしは、なんでも、おまえさんたちのほしいと思うものをやるから。」といわれました。けれども、小人たちは、

「たとえわたしたちは、世界じゅうのお金を、みんないただいても、こればかりはさしあげられません。」とお答えしました。

「そうだ、これにかわるお礼なんぞあるもんじゃあない。だがわたしは、白雪姫を見ないでは、もう生きていられない。お礼なぞしないから、ただください。わたしの生きているあいだは、白雪姫をうやまい、きっとそまつにはしないから。」

^{おうじ}王子はおりいっておたのみになりました。

王子が、こんなにまでおっしゃるので、^{かた}気だてのよい小人たちは、王子の心もちを、^{けらい}気のどくに思って、その棺をさしあげることになりました。王子は、それを、

^{けらい}家来たちにめいじて、^{かた}肩にかついでこぼせました。ところが、まもなく、家来

のひとりが、一本の木につまずきました。で、棺がゆれたひょうしに、白雪姫がかみ切った^{どく}毒のリンゴの一きれが、のどからとびだしたものです。すると、まもなく、お姫さまは目をパッチリ見ひらいて、^{かん}棺のふたをもちあげて、起きあがってきました。そして元気づいて、

「おやまあ、わたしは、どこにいるんでしょう。」といいました。それをきいた王子のよろこびはたとえようもありませんでした。

「わたしのそばにいるんですよ。」とあって、いままであったこととお話しになって、そのあとから、

「わたしは、あなたが世界じゅうのなにものよりもかわいいのです。さあ、わたしのおとうさんのお城^{しろ}へいっしょにいきましょう。そしてあなたは、わたしのお嫁^{よめ}さんになってください。」といわれました。

そこで、白雪姫もしょうちして、王子といっしょにお城にいきました。そして、ふたりのごこんれいは、できるだけりっぱに、さかんにいわわれることになりました。

(略)

底 本：「グリム 世界名作 白雪姫」光文社
1949（昭和24）年3月5日初版発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

翻訳者：楠山正雄

入 力：大久保ゆう

校 正：鈴木厚司

2005年2月22日 青空文庫作成